

あなたの身近にいる人が、大切な人を亡くした時、あなたは どうしますか？

グリーフケアについて考える (こども編)

聖学院大学 非常勤講師
村上 純子

子どもと「死」について話すことは難しいことかもしれませんが、とても大切なことです。子どもは5歳頃から死の概念を持つようになっていっていますが、それは間違った非現実的なものを含んでいる場合も多くあります。

遅かれ早かれ、子どもたちは「人の死」を経験します。そのとき、誤った考えや無知は子どもに恐怖心や不安を与えますが、「人が死ぬ」ということは何が起きるのかを正しく理解していれば、不必要な混乱を避けることができます。また、大切なことは、子どもが死についてのいろいろな思いや疑問を、自由に話すことができるということです。

この物語は、私と娘(当時小一)が、「ななちゃん」が亡くなったときにした会話に基づいたものです。お子さんと一緒に読んでいただき、「死」について話すきっかけ、手助けになればと思います。

「ななちゃんのこと」

ある夏の夜、ママが「優花(ゆうか)、お話があるの」と言った。
「ななちゃんがね、今日死んじゃったの」
「え？」
「ななちゃんはね、死んで天国にいったの。だからもういっしょには遊べないのよ」
だって、ななちゃんはまだ子どもなのに…。目になみだがうかんできたけど、泣いちゃいけないと思ってがまんした。

ななちゃんは、教会学校のお友だちだった。まだ4才。いつもお母さんといっしょに来て、お母さんのおひざにすわったり、背中にだきついていた。でも大きな声でお歌を歌ったり、すばしっこくって、おいかけるとパーッと逃げていったこともある。笑った顔がかわいかったななちゃん。

去年の秋、ななちゃんは入院した。頭の中に悪いおできができたから、それをとる手術をしたんだって。だからあたし、毎晩ねる前に「ななちゃんが元気になりますように」ってお祈りしていたの。

それなのに、神さま、なんでななちゃんは死んじゃったの？ あたしが悪い子だったから、お祈りをきいてくれなかったの？ ななちゃんにお手紙を書いてあげなかったから？ ななちゃんにあげる歌のテープを録音するとき、ちょっとふざけちゃったから？

ママが言った。

「優花のせいじゃない。神さまのお祈りのこたえはね、ときどき私たちがほしいこたえとちがうことがあるの」

「でもどうして？ あたし、やっぱりななちゃんには元気になってほしかった」

「そうだね。でも、神さまはそうされなかったの。どうしてかは、ママにもわからないけど」

ママは大人なのに、わからないこともあるんだ。わからなくてもいいんだって。

「ななちゃんともう会えないのは、かなしいよね。泣いてもいいよ」ってママが言った。そしたらポロって、なみだがこぼれちゃった。ママも泣いているみたいだった。

あたしは、ようちえんにいた小鳥のピーちゃんのことを思い出した。ある朝先生がきたら、ピーちゃんはもうかごの中で死んでいたんだって。あたしはピーちゃんにさわった。いつもはくちばしでつつかれるのに、ピーちゃんはもう動かなかかった。ふわふわの毛だったけど、つめたいかんじがした。

その日、みんなでピーちゃんをようちえんのうら庭にうめてあげた。ピーちゃんが大好きだったえさも入れて、土をかぶせて『ピーちゃんのおほか』って書いた木をたてた。

ななちゃんもピーちゃんと同じように死んじゃったんだ。

ゲームだと、ボス戦の前にはセービングポイントがあつて、そこでちゃんとセーブしておくんだ。もし敵にやられて死んじゃっても、セーブしたところからまたやりなおしができるもの。

でもななちゃんもピーちゃんも、ゲームじゃない。セーブしたところに戻って、生き返ったりしないんだ。

ママとななちゃんのおわかれ会にいった。ななちゃんの写真や、大好きだったお洋服、かばん、ぬいぐるみやオルゴールが置いてあった。

ななちゃんはお人形さんみたいだった。まっしろで、かわいかった。ずっと前にほっぺたをプニプニしたみたいに、ななちゃんのほっぺたにさわりたいけど、さわれなかった。

「なんだか眠っているみたい」でもそうじゃないことは、わかっている。もうななちゃんには目をあけないんだ。

ななちゃんのお母さんが「ななちゃんと遊んでくれてありがとうね」と言ってくれた。でもねあたし、ななちゃんとあんまり遊んでいなかったの。もっといっしょに遊べばよかった。おり紙をおってあげたり、追いかけてこも、もっとしてあげればよかった。でももうできないんだ…。

おわかれ会では、ななちゃんの好きな歌を歌って、ぼくし先生がお話をしてくれた。

「みんなに3つのことを知ってほしいと思います。ひとつめは、生きてるってすごいことなんだ、ってこと。みんな、はなをつまんで、口を押さえてごらん」

う～ん、くるしいよ。

「それが生きているってこと。心臓が動いて、息をしている、それが生きているってことですよ」(以下略)